

編 集 後 記

平素より杏林医学会雑誌をご覧いただき誠にありがとうございます。第55巻では前巻に引き続いで「医学部基礎医学系教室の最前線」として、病理学、細胞生化学、代謝生化学、統合生理学の各教室から魅力的な研究内容やその成果についてご紹介いただきました。第1号では昨年11月18日に開催された第52回市民公開講演会「遺伝性腫瘍の最新情報」における遺伝性大腸がん、遺伝性乳がん、遺伝性卵巣がんとゲノム医療に関する総説が寄せられ、例会や杏林メディカルフォーラムの報告も掲載されています。第2号から第4号では原著論文、学位論文、症例報告に加えて、「免疫細胞の脳内浸潤機構」の総説、データサイエンス教育センターの紹介、学生リサーチ賞の報告や、第16回共同研究プロジェクトと若手支援研究について紹介されています。新型コロナウィルス感染症も一段落して、杏林学園の学生とメディカルスタッフの活気に溢れた研究が幅広く取り上げられておりますので、「杏林医学会」に是非アクセスしていただければ幸いです。

さて、第55巻から気になるキーワードを挙げますと、「病理診断」「データサイエンス」「デジタル社会」があります。古代から現代まで人が診断し医療に応用する時代から人工知能（AI）が瞬時に解析して診断の補助をする、あるいは人に替わって判断する時代へ移行しつつあります。今年のノーベル物理学賞と化学賞が共にAI関連の受賞であったことは記憶に新しいところですが、チャットGPTに代表されるAI技術を医療の分野でどのように活かして行くのか真剣な議論が必要です。特にどんなにAI技術が進んでも、人の世界にある「遊び（遊戯ではなくてハンドルの遊び）」や「揺らぎ（曖昧さ）」が無くなると思考力や判断力が鈍り、いずれ文明に危機が訪れるかも知れません。1984年公開の「タミネーター」から40年、1999年公開の「マトリックス」から35年ですが、決してSFの世界だけでは済まされないように感じています。すなわち、人が主体でありながらAIを友として、医学と医療のみならず社会を発展させていきたいものです。

(S.I.)

編 集 委 員

(長) 長島文夫
跡見友章 阿部展次 今泉美佳
井本滋 岸野智則 高崎由佳理
戸成綾子 長瀬美樹 森秀明
渡邊衡一郎

杏林医学会雑誌 第55巻 第4号

URL : <http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/user/kyorinms>

令和6年12月27日発行

編集人 長島文夫
発行所 杏林医学会
東京都三鷹市新川6-20-2
杏林大学 医学図書館内